

# 日本中国學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chugoku Gakkai

二〇一四年(平成二十六年) 十二月二〇日  
第二號(通卷第二十六号)



## ●目録

巻頭言

- 〇一 四年間を振り返って  
川合 康三
  - 〇四 日本中国学会第66回シンポジウム  
中国とはなにか  
濱田 麻矢
  - 〇六 中国戲劇史国際学術研討会暨  
中国古代戲曲学会  
2014年年会の報告  
福満 正博
  - 〇八 ウイリアム・バクスター教授との上古音研究  
秋谷 裕幸
  - 一〇 各種委員会報告  
大会委員会／論文審査委員会／出版委員会／  
選挙管理委員会／研究推進・国際交流委員会／  
広報委員会／将来計画特別委員会
  - 一四 日本中国学会2013年度(平成25年度)収支決算書
  - 一五 日本中国学会2014年度(平成26年度)予算書
  - 一六 学界展望へのご協力(資料提供)のお願い
  - 一七 2014年度 会員動向  
2015-2016年度 新役員一覧
  - 一八 2014年度 新入会員一覧
  - 一九 事務局からのお知らせ  
「国内学会消息」についてのお知らせ
  - 二〇 「日本中国学会報」論文執筆要領
- 編集●早稲田大学文学部 岡崎由美  
〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-11  
メールアドレス: okazakiy@waseda.jp  
発行●日本中国學會  
〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25 斯文会館内  
ファックス: 03-3351-4853  
メールアドレス: info@nippon-chugoku-gakkai.org

# 四年間を振り返って

理事  
長  
川合  
康三

二年、そしてそれに引き続く二年、併せて四年間にわたる理事長の任期も、なんとか終わりに近づきました。これといった事を何ら成しえないまま、荏苒と時を過ごしたことを、会員のみなさまに深くお詫び申し上げます。

今、日本中国学会は大きな岐路に立たされています。会員が膨張して二千名を越えたピークは懐かしい昔の話、一九九八年を境にここ十五年ほどは入会者より退会者が上回る減少傾向がほぼ毎年続いています。これは日本の総人口の減少、とりわけ若年層の減少によって、あらゆる領域において見られる右肩下がり現象の一つでしょうが、人文学の学会ではとりわけ顕著であり、そのなかでも中国学会はことに著しいようです。

会費の負担を減らして会員の退会を押しとどめるべく、前池田知久理事長は大学院生の会費を引き下げる処置を決断され、それに引き続いて七十歳以上の会員にも軽減措置が講じられました。そしてさらなる優待も現在検討されています。

しかしこうした、いわば特典を次々設けたところで、会員数と会費収入の増加が見込まれるのかどうか、むずかしいところです。そもそも七千円という年会費が高すぎるという印

象をわたしなどにもっています。総収入の増加が見込めないなかで、中国学の発展に資する活動を続けて行くにはどうしたらよいか、これが今当面している深刻な課題です。

学会の委員会の活動、大会の開催などに当たっては、すでに年々厳しい削減が加えられています。委員の方々、大会開催校の方々には、たいへんな個人的負担を強いているのが実情なのです。しかし切り詰めていくにも限度があります。いずれは大幅な組織・活動の見直し、原点に戻って出直すというドラスティックな改革に踏み切らざるをえないかと予想されます。変化する状況のなかではそれに合わせて対応していくほかありません。

世の中の変化に翻弄されているのは、学会の運営だけに限りません。そもそも中国学研究が従前とは異なる困難な状況に立たされています。研究職の減少、研究に向かう学生・院生の減少、ここにも「減少」の文字を繰り返すほかありません。日本の文化のなかにおいて中国学のもつ役割が明治以降、低下の一途をたどり、その傾向は戦後さらに拍車が掛かる一方です。学ぶと言えば中国古典に決まっていた江戸時代に戻ることなど、もはや時代錯誤というほかありません。こうしたなかであって、中国学研究の意義をいかに主張するか、先人によって培われてきた学の伝統をいかに後世に伝えていか、わたしたちの責務は重大と言わねばなりません。

加えて近年は日本と中国との関係が悪化していることも、斯学が悪い影響をもたらしているようです。言ってみれば人々の間で「中国離れ」が起っています。とはいえ、巷間には中国関係の書物が驚くほどたくさん出ています。現在の中国への関心ははなはだ強い。それをばらばら見てみますと、今の中国が近代国家として理解しがたいせいも、伝統中国から現在の中国を捉えようとする視点もかなり混じっています。ところがそのなかには噴飯ものの中国理解も目につきます。そうしたありさまを見ると、中国を研究対象としているわたしたちがほおかぶりしたままでいいのだろうかという思いが生じました。伝統中国に関する、可能な限り正確な認識を提示することは、研究者としての責務ではないかと。

そこで今年の大会を主催する大谷大学の乾源俊さんに、研究者の立場から中国とは何かを考えるシンポジウムを開けないか、持ちかけてみました。本部から大会開催校にこうした提案をすることは、開催校の主体性を奪う懸念もあります

が、乾さんとの長い交遊ゆえに僭越な口出しをしてしまいました。幸い、同じ思いを抱いていた乾さんも賛同していただき、大阪大学の浅見洋二さんが中心となって、その企画に向けて尽力していただくことになりました。そうして秋の大会ではご存じのようなシンポジウムが実現した幸いです。講演をお願いしたかったリービ英雄先生へのコンタクトは、法政大学における同僚である黒田真実子さんをお願いし、おかげでリービ先生のはなはだ刺激的なお話をうかがうこともできました。こうして振り返ってみますと、周囲の方々の献身的なご協力があったからこそ可能であったと、改めて感謝の念を覚えます。

周囲の方々の力といえば、理事長の任期の間、ずっと支えてくださった事務局の面々にも厚くお礼を申し上げなければなりません。和田英信さん、宮本徹さん、高芝麻子さん、横打理奈さん、森田さくらさん、この方々の機敏で確実な働きあってこそ、学会は維持されてきました。実はわたしは在任中の多くは国外におりました。日本を離れることなど、このすばらしいスタッフに恵まれなかったらありえないことでした。

日本の大学を退いてから、台湾やアメリカの旧知の方々のお誘いを受けて、外地の大学に勤めることになりました。こちらからお願いしたわけでもないのに声を掛けてくださった御厚意に報いるべく、というより、新しい場に身を置いてみたいという思いからというべきでしょうか、まずは台湾大学に一年、そして今は米国・ブランダイス大学で講学しています。

こうした機会を与えられたおかげで、日本とは異なる大学のありさまを垣間見ることができました。台湾とアメリカとはさまざまな点对照的です。台湾では教師が一方的に話し、受講者は謙虚にそれを吸収するといったかたちが多い。そのために台湾の学生は基本的な知識をきっちり身につけています。一方、アメリカでは学生が次々自分の意見を言うのが普通のようなようです。彼らはそれによって作品を自分なりに把握する力を鍛えています。もっとも台湾でもわたしが傍聴した蔡瑜教授のゼミのように、院生の発言が中心の授業もありましたから、一概には言えないのですが。

わたしの見聞が限られているためもあるでしょうが、日本の「演習」にあたる授業が台湾でもアメリカでも乏しいかのように見えました。教師と学生とが一緒になってテキストを前にし、一言一句の正確で深い理解を求める、これは文献を対

象とする分野では最も基本的な訓練の場であると思います。「演習」の延長上にあるのが、日本では広く行われている読書会です。研究歴の長短にかかわらず、一堂に集まって作品を読み解いて行く。これはおそらく江戸時代以来、外国の文献を対象とする必要から生じた方法かと思われます。

今年の前半の三か月間は、以前は国家科学委員会に、今は科技部に属する「人文学研究中心」という組織の招聘で台湾に滞在しましたが、そこでわたしに求められた役割は、日本で活発な読書会の方法を台湾にも紹介してほしいというものでした。読書会の意義は十分に知られているのです。

演習、読書会に限りません。研究の成果そのものにも、日本にはもっと広く知られるべきものがたくさんあるはずですが。近年は日本の重要な研究書が中国語に翻訳出版をされることも増えてきていますし、中国・台湾には日本の研究動態に強い関心をもっておられる方も少なくありません。しかし英語圏ではあまり浸透していないかに見えます。熱意のある一部の研究者にゆだねるだけでなく、積極的に広く発信することが必要なのではないのでしょうか。そうしてこそ、国を超えた中国学の全体の進歩が期待できるはずですが。

しかしそこには言葉の問題が横たわっています。中国語、英語の広範な普及に日本語は及ばない。ことにわたしのようにならざるに外国語ができない者には、自分の言いたいことが伝えられないもどかしさが付きまといます。中国語なり英語なり、或いはその双方を自在に操れる人材は今後増えていくにしても、やはり限りがあることでしょう。

さらに言葉には別の問題もあります。理系のように専門用語が世界共通というわけに人文学はいきません。日本語でしか表現しにくいことのなかに微妙な、大切な部分があるはずですが。あっさり日本語を捨てることは、日本の文化のためにも絶対にできないことです。アメリカでは中国に関する分野でも英語がとても大切にされているようです。英語で論文を書き、英語の翻訳を増やしていく—決して中国語ができればそれでいいとはされていません。日本語で考え、日本語で書く一方、外国語でも発表していく、当面はそうしていくほかなさそうです。

解決しがたい問題をあれこれ綴ってきましたが、土田健次郎新理事長のもとでの新たな展開を祈るばかりです。みなさま、ありがとうございました。

# 日本中国学会 第66回大会シンポジウム 中国とはなにか

神戸大学  
濱田 麻矢

66回大会の初日午後は、リービ英雄さんの特別講演『大陸、日本語として』で始まった。司会の藤井省三先生による刺激的な紹介を承け、リービさんは「中国を(リービさんにとっての母語ではない)日本語で綴ること」の面白さと危うさ、そして可能性について、自身の著作を振り返りながらダイナミックにお話してくださった。その熱気が冷めやらぬうちに引き続き行われたのがこのシンポジウム『中国とはなにか——言葉と権力』である。四人のパネリストが「為政者」「知識人」「老百姓」「少女」という角度からそれぞれ権力と言葉、そして文献上の中国と現実の中国について語ろうという企画であったが、この四人が中国を語るときに共通して持つ命題——つまり「外国人がどう中国を語るのか」——の複雑さが、すでにリービさんによって示されたようでもあった。

以下、シンポジウムの内容を個人的な見地から振り返ってみたい。小島毅先生の「為政者の視点」では、まず「王」こそが天と人とを結ぶ絶対的な存在であり、その言葉はそのまま国家の規範とされたとの紹介があった。具体的な例と

して取り上げられたのは『尚書』説命篇、「先王の成憲」を重んじることこそが国を安んじる道という記述である。先王とは誰か、成憲とは何かについてはいくつかの解釈が存在するものの、「先王の作った成憲(もちろん言葉によってなりたっているもの)」が後代を律する規範=権力となっていくことに変わりはない。その権力の絶対性、不動性のために、聖賢の残した言葉は時代に応じてさまざまなバリエーションを生むことになった。その揺り戻しとして、たとえば清朝の考証学者たちは残された言葉そのものではなく、長い年月の中に付け加えられた恣意的にも見える解釈に異議を申し立て、先王の言葉(権力の源泉)のオリジナルな姿に近づこうとしたということである。

続いて浅見洋二先生から「知識人の視点」についてのご報告があった。為政者の言葉が絶対性を持つ「権力」そのものであったのに対して、古代中国の知識人(士大夫)に求められていたのは、為政者に奉仕しながらもその過誤を正し、諫言を呈する役割であった。為政者の権力が自らの存在を抑圧し、扼殺しようとするとき、彼らはいかなる言葉を以て抵抗し、生き延びようとしたのか。この報告で重視されたのは、国家権力の前に「直言」が許されない場合に、知識人たちがとったいくつかの韜晦とも言える態度である。たとえば孔子は言葉を慎む「避言」という態度を、蘇軾はメッセージを深層に包み込む「庾詞」という態度を表明した。それは詩経の昔から伝わる「比興」という伝統とも呼応しあうものである。「分かりにくい言辞に真意を隠す」という知識人の態度は、文化大革命期の地下文学に端を発する「朦朧詩」にも共通点を見出すことができる。権力者には理解できないコードによって文学が守られ、文字獄を生き延びるという物語はおそらく古代にもあったことだろう。しかし守られたその文学は、おそらく権力者のみならず、一般の人々にも理解することはできない。知識人たちの守った言葉の天地が、彼らの閉じられた世界にとどまらずに市民たちに届くためには何が必要なのか、そもそも、古来から知識人にとって、彼らが語りかける対象として「老百姓」たちはイメージされていたのか、という問いかけで報告は閉じられた。

三番目の報告者は金文京先生で、「老百姓」を孟子が言う「力を勞して人に治められる」存在としてざっくり定義され、まずは先行研究が少ない工人についての紹介がなされ

た。工芸品には最初期は監督官吏ののちに工匠の名前が銘してあったものが、次第にその順序が逆転していく。韓愈の「師説」では工人と士人ははっきり区別されているが、柳宗元は薬商人のために伝をつくり、「心を勞する者」という評語を与えて孟子がいう士人と同じ扱いをしている。正史にも『史記』以来概ね占術師や医者等を主とする技術者についての伝があり、民間工人の地位は決して低いものとは言えなかったようだ。また、技術的知識を用いて自営する山人は、知識人と民間の工人をつなぐ存在であり、明末にその勢いは最も盛んになっていた。「四大発明」など、中国が誇る技術発明はもちろん工人たちの仕事である。その価値観や声を知ることは、ともすればエリートと大衆というような二項対立に硬直してしまいがちな中国理解を柔らかくしてくれるだろう。さらに古代の軍人については『水滸伝』などの小説が主な資料になるが、中国の軍隊はその内部に士農工商、それに芸人を含みこんだ大きな組織であるという指摘があった。莫言や閻連科も解放軍の出身であり、軍に所属することで民間では考えられない自由な創作が可能になったのだという。最後に、前半の二報告に呼応する形で、皇帝の言葉の届け方について興味深い事例が紹介された。唐の記録によると、聖旨を読みあげたのは都からきた使者ではなく、現地の官吏であったという。絶対的な権力者の言葉は、その地方の民に理解できる方言となって直接届けられたのであった。現代中国でも、北京に押し寄せて叩頭しながら請願する「民」を地方の「官」が力づくで排除する光景が見られるのはまさにその名残であるというお話だった。

四番目に濱田からは「少女の視点」として、伝統中国では発話者として認識されていなかった女性の言葉が、五四以降のように現れたのかを報告した。古来「女子は才無きが徳」とされ、自分の将来について考えることなど許されず、成長すればそのまま見も知らぬ家に嫁ぐというのが良家の女子のライフコースであったわけだが、女子教育が始まると、生家から婚家へ、切れ目なしに続いていた人生のあり方に間隙が生じる。勉学に励んで自己実現を夢見たり、自由恋

愛、自由結婚を敢行したりする「新女性」の誕生である。家父長制という桎梏から逃れた少女たちが、次には自ら選び取ったはずの恋愛／家庭に足をすくわれ、再び家庭に閉じ込められていく物語が民国期には多々あること、さらに共産主義革命が至上の命題として現れた時、家父長制や恋愛という問題が全て棚上げされたこと、しかし大陸以外で描かれた小説においては、共産主義が親子愛、夫婦愛といった「人倫」を破壊し、結局少女を不幸にしたのだという解釈がなされることなどを紹介させていただいた。

大まかに言えば、小島報告と浅見報告は「言葉(権力)の作り手および履行者」について新たな角度から考察を加えるものであり、金報告と濱田報告は「言葉(権力)を持たざる者」を可視化しようとする試みであったと言えるだろう。限られた時間の中では、もとより「中国とは何か」という大きな問題の見取り図を示すことはできなかったが、人文学研究者としては、この問題には「ことば」という角度からがっぷり取り組むしかない。その機会を与えてくださった浅見先生と理事長の川合康三先生に心から感謝を申し上げる。

話を戻すが、リービ英雄さんは上述の講演の中で、多くの日本人がリービさんによる万葉集翻訳の話喜んで聞き、中上健次など前衛的な日本人作家の話にも耳を傾けるが、中国の話については無関心さを隠さない、と言われていた。今回のシンポジウムの主な聞き手は日中学会会員であるから、中国についての関心は共有されていたと思う。しかし、研究の蛸壺化が進む中では、たとえば対象とする時代やジャンルが異なる報告は聞き流してしまうという傾向もあるだろう。「中国とは何か」という問題を切実なものとして考えるために、狭くなりがちな視野を今一度広げなければ、と痛感した。



シンポジウム風景

# 中国戲劇史国際學術研討会暨 中国古代戲曲学会 2014年年会の報告

明治大学  
福満 正博

2014年4月4日から6日にかけて、中国古代戲曲学会の年会在、中国広東省広州市の中山大学で開かれました。日本からは、東洋文庫の田仲一成先生、早稲田大学の岡崎由美先生、九州大学の中里見敬先生、そして私が参加しました。

大会は、5日の午前に、上海戲劇学院の葉長海先生、台湾の曾永義先生、日本の田仲一成先生、アメリカのIDEMA先生、中山大学の黄天驥先生の順で基調報告があり、大会が始まりました。田仲先生の「戲劇文学産於孤魂祭祀之説（戲曲は孤魂祭祀から始まった）」という報告は、説得力があり参加者の注目が集めました。また、葉長海先生の「明清冊封使記録の琉球演劇」という報告は、別の意味で驚かされました。

午後からは4組に分かれて、百数十篇の論文の発表と質疑応答がそれぞれに行われました。それをすべて紹介することはできませんが、目についた報告を内容別に五つに分けて題名を挙げることにします。

## 1. 総論・通史

田中一成「戲劇文学産於孤魂祭祀之説」、中里見敬「浜一衛看到的1930年代中国演劇」、曾永義「戲曲歌樂雅俗兩大類型—詩讀系板腔体与詞曲系曲牌体」、康保成「『宋元戲曲史』百年祭—王国維中国戲劇起源」、李昌集「戲曲写作与戲曲体演变」、劉禎「实践与理論—關於中国戲古曲表演理論体系」、李昌淑「中国古代社会的遊戯精神与戲曲」、徐大軍「“伝奇”文体名義の演变」、黎国韜「歴代教坊制度沿革考」、ト亜麗「試論中国影戲的戲劇化進程—以“三国”題材影爲例」、鄭駿捷「元明清戲曲作品与『説岳全伝』の形成」、齊慧源「古代戲曲選本与数字化」、黃仕忠「森槐南与他的中国戲曲研究」、李亦輝「宗元観念与明代伝奇戲曲曲辞審美理想的建構」、孟梅「古代“棄婦”戲曲源流与演变的文化探析」、龍賽州「從“風搅雪”現象看戲曲發展」、魏一峰「科班教育与漢劇芸術传承」、陳世雄「西方戲劇的角色類型与中国戲曲的脚色行当」、姚小鷗・盧翹「“神馬”与中国古典戲劇中的山神和土地」、戚世雋「古代劇本与表演關係」、彭恒礼「蝗災与戲曲」、陳建華「囉哩囉：作爲咒語的淵源及其意義擴散」

## 2. 宋元戲曲

IDEMA「元雜劇—版本与翻譯」、薛瑞兆「金代神廟舞台碑記」、楊秋紅「“副浄色発喬”辨正」、徐燕琳「雜劇与雜体」、閔四平「元雜劇“三国戲”三題」、楊勝朋「由“金盞兒”詞曲看元雜劇『趙氏孤兒』質朴特色」、姚小鷗・孟祥笑「『玉壺野史』“生旦雜処”考辨」、鄧黛「樂教伝統与元雜劇的意境」

## 3. 明代戲曲

楊惠玲「明清江南宗族祭祀演劇及其文化功能」、杜桂萍「尤侗“鈞天樂”伝奇与明末才子湯伝楹」、李舜華・陳惠卿「明初教坊制度考略」、許建中「『張協状元』中劇情結構論与排場派角」、張青飛「明代戲曲挿団本中的“一劇多凶本”現象」、陳旭耀「論明刊『西廂記』文体体制的伝奇化」、裴喆「晚明曲家五考」、汪天成「巾箱本『琵琶記』価値」、張文恒「万曆刊本“三刻五種伝奇”考略」、徐子方「明雜劇風格論」、劉叙武「明代折子戲研究」、趙蝶「『牡丹亭』の夢与真」、魏遠征「湯顯祖『南柯記』仏理禅趣再探」、鄧斯博「神性視野下『南柯太守伝』与『南柯夢記』人物形象爲中心」、呂靖波「『鳴鳳記』創作年代与“時事劇”之義界」、趙山林・張婷婷「論嘉靖本《荔鏡記》」、王永恩「史槃戲曲創作中創新」、譚美玲「高濂《玉簪記》風情月思的背後」、王蘇生「王驥德“劇戲”説的核心内容与歴史価値」、馬衍「『尋親記』明刻本考辨」

#### 4. 清代戯曲

董上徳「雅部衰落と“不完整戯劇性”の關係」、劉慶「清代戯劇監管処罰措施舉隅」、熊静「脈望館本教坊編演雜劇和清内府承応戯」、呂珍珍「晚清私寓の戯曲伝承活動」、李碧「観劇詩視闕下冒襄家班研究」、徐巧越「嘉慶二十四年清宮内廷承応状況初探」、趙興勤「清代詩詞中散見戯曲史料の學術價值」、林佳儀「論『南詞定律』之体例及編輯意識」、陳志勇「『燕蘭小譜』作者安樂山樵考」、張文徳「葉憲祖『双脚記』劇情与本事考論」、李東東「竹友齋刊本『梨園集成』文献述評」、鍾明奇「論李魚及其小説戯曲創作」、陳才訓「“与人同善”—余治“善戯”創作摭談」、林智莉「余治の戯曲創作及其勸善劇之研究」、黃純「清代広州城市演劇活動研究」、趙鉄鋅「清車王府藏影詞写本研究三題」

#### 5. 地方戯曲

福満正博「九江青陽腔《白兔記》与《白兔記》演變」、黃振林「論明清伝奇与地方声腔關係の新思考」、馬華祥「弋陽腔の嬗變」、蘇子裕「錯誤解説“錯用故郷語”誤入声腔研究歧途」、朱恒夫「論戯曲劇種の定義与明清以來的劇種」、許愛珠「芻議弋陽腔の民間形成」、鄭尚憲「明代梁祝戯曲在蒲仙戯中の遺存」、葉明生「福建宋雜劇与道教科儀關係考」、田興国「文人与民間視域中“柳毅伝書”—以恩施離願戯《青家莊》為個例」、謝真元「藏、漢戯曲表演藝術特徵之比較」、李躍忠「簡析湖南影戯劇目的命名方式及其文化内涵」、賈三強「明代陝西戯曲創作与表演述論」、張蕾「陝西省藝術研究所藏清末民国時期秦腔刻印劇本考述」、王萍「芻議永靖離舞戯民間叙事的多元性特徵」、朱妮妮「閩南戯曲韻部系統与用韻特徵分析」、駱婧「閩南儀式戯劇探微—從“猴戯”和“雷有聲”說起」、肖少宋「潮汕戯曲与潮州歌冊—戯曲与説唱の良性互動」、俞驍窈「後官辦時代的地方戯路在何方?—南通地区童子戯生存現狀調查」、張勇風「当代社会變遷与農村戯曲生態—对上党梆子戯窩望頭村的個案剖析」、黃李娜「行路難：對恩施沙地木偶戯の田野調查」、王曉鑫・洪世鍵「南派布袋戯の当代民間存続」、何瓊「侗族伝統戯劇文化遺産“活態”保護与伝承の途徑」、張帆「福建福清地区提線木偶《日連救母》当代演出考察」、潘培忠「論閩台歌仔戯の“撿戯”伝統」、鄭元祉「秧歌之特性」、王兵「新加坡華語戯曲研究述評」

#### 6. 中国演劇と海外

岡崎由美「日本江戸時代中国戯曲学習—《水滸伝》《蜃中楼》《琵琶記》の日記本」、黃土忠「森鴉外与他的中国戯曲研究」、全媛澄「幸田露伴早期的中国戯曲研究」、張祝平・易静「西班牙図書館藏『風月錦囊』挿図与戯曲舞台戯式」、孫書磊「巴伐利亚図書館藏『合璧西廂』考述」、丁淑梅「双紅堂藏清末四川唱本『三匣劍』整理研究」、

以上が、発表の主な題目です。全体を見て思うことは、宋元戯曲研究が少ないということと、地方戯研究で南方の地方戯の研究発表の占める割合が多いことでしょうか。これが中国で行われている戯曲研究の全体の傾向を表しているわけではないでしょう。広州市の中山大学で挙行された戯曲史研究の年会であるので、地域的な偏りが影響しているかもしれません。

しかし、以前とくらべて格段と違うこともあります。

「昔は証拠も論証も何もなく、ただ結論だけを大声で叫んでいた時代もありましたが、最近はずいぶん変わりましたね」

これはある老先生が、ぼつりともらされた言葉です。確かに、最近の中国の特に若い人の論文は、きわめて実証的になってきました。

次に、研究の新しい傾向として、清代戯曲と、地方戯の研究が多くなってきたことです。清朝の宮廷戯曲に関しては、相当に資料が出てきているなという感じです。また地方戯は、広く様々な劇種の研究がされてきていると思いました。不満を少し言えば、戯曲史的な研究・文献研究と、現地調査・地方戯の研究が相変わらず分かれたままです。若い研究者が増えているので、座学的な研究ばかりでなく、もう少し広く現地を見た方がいいのではないかというのが私の感想です。

最後に、黃土忠先生が中山大学のこれからの出版計画を説明してくれました。参考のために示しておきます。

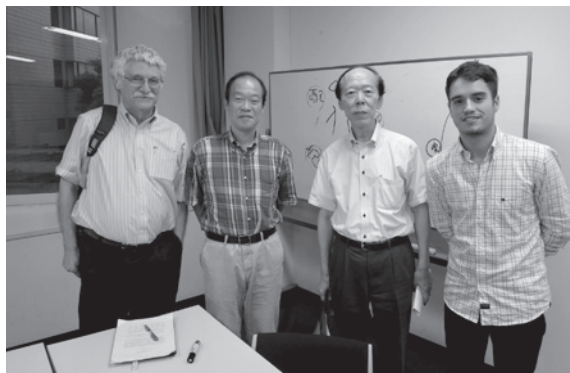
1. 文献の標点・校勘  
全明雜劇、全明伝奇、清車王府藏戯曲全編等
2. 広州大典  
広府木魚書、粵劇文献彙編等
3. 海外藏珍稀戯曲俗曲文献叢刊  
日本所藏稀見中国戯曲文献叢刊第2輯、日本早稲田大学蔵中国俗文学文献彙刊、北米地区藏珍稀俗文学彙刊等
4. 戯曲目録  
明代雜劇全目、明代伝奇全目、東京大学双紅堂文庫蔵分類目録解題等
5. 説唱唱本目録  
新編広東木魚書総目、新編潮州歌冊総目等  
これらを、これから出していきそうです。壮大な計画です。  
以上で、私の報告を終わります。

# ウィリアム・バクスター教授 との上古音研究

秋谷 裕幸

## 1. はじめに

6月12日から7月16日までの35日間、アメリカ合衆国ミシガン大学のウィリアム・バクスター(William Hubbard Baxter)教授が、日本学術振興会平成26年度外国人招へい研究者(長期)(L14505)として来日された。8月11日までの滞在予定であったが、予想外に生じたまことにやむを得ぬ事情により予定を繰り上げての帰国となった。小文では35日間にわたるバクスター教授の研究活動等について紹介し、受け入れ研究者としての責務の一端を果たしたい。



早稲田大学での研究会 左端がバクスター教授

## 2. ウィリアム・バクスター教授の上古音研究

バクスター教授は中国語上古音研究の第一人者であり、1992年の*A handbook of Old Chinese phonology* (Mouton de Gruyter)(以下*Handbook*と略称)により広く知られている。該書は顧炎武以来400年におよぼんとする上古音研究の到達点と見なしうるものであった。ようやく安心して使うことのできる上古再構音を手にしたと当時思ったのは私だけであろうか。しかしバクスター教授はそこにとどまることなく、Laurent Sagart氏を共同研究者にむかえ、ただちに改訂に着手する。それが結実したのが*Old Chinese: A New Reconstruction*(以下*Old Chinese*と略称)であり、今年中にOxford University Pressから出版されることになっている。今後の研究活動はこの*Old Chinese*を中心に展開した。

## 3. 研究交流

主たる滞在先となった愛媛大学では、*Old Chinese*の読書会を断続的に行った。該書がまだ出版されていなかったので、バクスター教授に校正刷りを提供してもらい、著者自らとそれを最初から読み進んでいった。私以外に、日本学術振興会特別研究員の野原将揮氏、北京大学副教授の汪鋒氏、シンガポール国立大学副教授の潘秋平氏、香港科技大学博士課程在籍中の沈瑞清氏が参加した。

また、6月28日に日本中国語学会関西支部例会(講演《上古汉语：白一平、沙加爾的新构拟系统》)(<http://www.chilin.jp/event/kansai.html>)、7月1日に早稲田大学古屋昭弘教授が企画された研究会“汉语上古音研究の新拓展”(研究発表《上古汉语的构拟和早期的汉语方言》)([http://www.chilin.jp/event/rel\\_file/140701furuya.pdf](http://www.chilin.jp/event/rel_file/140701furuya.pdf))、7月5日にチベット=ビルマ言語学研究会第33回会合(研究発表“The reconstruction of final \*-r in Old Chinese”)に参加され、*Old Chinese*に関係する研究発表あるいは講演を行うとともに、日本在住研究者との研究交流を積極的に展開された。これらの研究交流が実現したのはひとえに各学会・研究会関係各位のご厚意によるものである。篤く感謝の意を表したい。

35日間という短い滞在期間ではあったが、研究交流に関する成果は十分に挙げる事ができたのではなかろうか。

## 4. “提案”としての*Old Chinese*と*Old Chinese*以後の上古音研究

上古音の定義は研究者の間で完全に一致しているわけではない。とはいえ“『詩経』の言語”という大枠はおおむね共



有されていると思われる。ところが*Old Chinese*は*Handbook*の改訂にあたり閩語、ミエン語、ベトナム諸語のデータを comparative evidenceとして大量に取り入れた。ことに重視されているのが閩語のデータであり、*Old Chinese*はJerry Norman教授が再構した閩祖語における声母対立をすべて取り込もうとしている。ここに*Old Chinese*の大きな特徴がある。第四章 Onsetsは閩語声母音韻史として読むことが可能なほどである。例えば“醉”は\**Cə*. [ts]u[t]-s (Cは何らかの子音、[ ]は暫定的な再構を示す)と再構される。ここで弱音節\**Cə*が再構されるのは、閩祖語で“醉”の声母に弱化声母が再構される点だけに基づいている。上古漢語の文献にその証拠を見いだすことはできない。この意味で*Old Chinese*が再構したのは伝統的な意味での上古音ではなく、Proto-ChineseもしくはProto-Siniticと称されてしかるべき理論的な音韻、語彙体系である。この再構音で『詩経』を朗読するわけにはいかない。またそれは閩祖語等と連動して改訂される可能性を免れ得ない、そういう不確定さをはらんでいる。

閩語、ミエン語、ベトナム諸語以外にも、*Old Chinese*は戦国竹簡資料の活用、形態論の再構などでも新機軸を打ち出している。

私のみるところ、*Handbook*が『詩経』の押韻、諸声符、中古音という伝統的3点セットを利用した上古音研究の完成形である一方、*Old Chinese*はその枠組みを超えた新たな上古音研究を模索した一つの“提案”である。率直に言って、*Old Chinese*における再構音は今後長期にわたり改訂され続けることになるに違いない。バクスター教授が自らの再構音体系をコンピュータープログラムに見立て、ver.いくつのように呼ぶ理由もここにある。そのプロセスで重要かつ不可避になってくるのが共同研究であろう。いかなバクスター、サガール両氏とて、*Old Chinese*が援用したあらゆる分野のデータに精通することは容易ではあるまい。現に野原氏は専門とする戦国竹簡のデータから*Old Chinese*の再構音に対して少なからぬ疑義を呈していたし、バクスター教授自身も私が再構した閩東寧徳方言祖語の再構音ファイルをご自身の上古音関連データベースファイルに取り込めるよう整形したりしていた。今後の展開が待たれる共同研究に日本在住研究者が関与するきっかけを今回の招へいがつくれたならばさいわいである。また、私としても自分で貢献できる部分があるのであれば、積極的に関わっていきたいと思う。その

先鞭をつけるべく、バクスター教授、野原氏そして私の3人で共著論文の執筆を始めている。

##### 5. 私が接したバクスター教授

バクスター教授が日本に滞在された35日間は私にとってかつてなく濃密な日々であった。それは6月12日車を運転する家内とともに松山空港にバクスター教授を出迎え、愛媛大学の宿泊施設に向かう車中で始まった。このとき早くも上古音に関する議論が始まり、それは7月16日の離日まで続いた。顔を合わせているときにはほぼ常に議論していた。雑談はあまりしなかったし、したとしてもアメリカや日本の学界に関する話題がほとんどであった。バクスター教授が来日されて2、3日過ぎた頃には、自分が語ることができる内容がもうなくなってしまったのではないかと動揺した。閩語音韻史、比較言語学の方法論、上古音再構などが主たるテーマであったが、野原氏や沈瑞清氏が松山にやってきたときには戦国竹簡にテーマが移り、私はほとんど議論についていけなくなった。読書会をするときには、3時か4時くらいに研究室に集まり6時半まで*Old Chinese*についてあれこれと議論をする。その後、夕飯を食べたりビールを飲んだりしながら9時過ぎまで議論が果てしなく続く。途切れることがまったくないので、「続きは明日にしませんか」という一言を差しはさむのに毎晩苦勞した。最初はテーブルの紙ナプキンに漢字や音声記号を書いて議論していたが、全部使ってしまいかねないので、レポート用紙を持ち歩くようにした。それにしてもこの精力、集中力は一体どこから生まれるのであろうか？

*Handbook*を評してsoberと表現したのはサガール氏である。この評言に共感を覚える読者も少なくなかろう。しかし、私が接したバクスター教授は、研究のまさにその現場におけるバクスター教授はsoberでも何でもなく、上古音という難敵を相手に奮闘する熱血漢であった。*Old Chinese*というきわめてchallengingな著書を65歳にしてサガール氏とともに世に問うた、私にとってはその理由をはっきりと理解することができた35日間だった。(2014年8月9日)

[付記] *Old Chinese: A New Reconstruction*は9月にOxford University Pressから出版された。巻頭の謝辞に故Jerry Norman教授の名を見いだし思わず泣いた。本書は、閩語音韻史に関してNorman教授が行った問題提起に対する、上古音研究からの真摯な回答とも言えるのである。(2014年11月17日)

## ❖ 各種委員会報告

### 大会委員会

委員長 赤井 益久

#### ○平成28(2016)年度大会開催校について

10月11日(土)と12日(日)の両日にわたり、本年度の学術大会が京都の大谷大学において開催されました。研究発表・特別講演・シンポジウムが多くの参加者を得て、成功裏に終了致しました。ご協力いただいた大谷大学乾会員をはじめとする中国文学会の方々、司会進行をお引き受けいただいた方々に厚く御礼申し上げます。また、同時に開催されました理事会に於いて、平成28(2016)年度の大会開催校が奈良女子大学に決定いたしました。

#### ○託児について

昨年度集計をして「中国学会だより」誌上に分析をご報告いたしましたが、大会委員会では引き続き検討を重ねております。現在関連学会や各分野の学会の大会開催時における「託児」に関する情報を収集しておりますので、ご存じの向きは学会本部もしくは大会委員会までお知らせいただければ幸いです。



### 論文審査委員会

委員長 富永 一登

#### ○10月11日の論文審査委員会

- ・学会報第67集の審査日程などを確認した。
- ・学会報の掲載頁数について、執筆者に周知をはかるため、掲載決定通知の際に論文審査委員会の方針を文書で伝えることにした。※以上の点は、12日の理事会で承認されました。

※2015年1月20日締切(消印有効)の第67集の投稿に当たっては、「学会便り」に掲載されている「論文執筆要領」に従うようお願いいたします。

なお、「論文執筆要領」13.に記載されている書留による郵送については、差し出しと受け取りの証明が残るもの(赤のレターパック、宅急便、海外から発送するEMS等)で、1月20日以前の消印があるものであれば有効です。但し、赤のレターパックの場合は、1月20日以前の消印が押されることを確認の上で投函願います。また、従来どおり、持参は認めませんので、ご注意ください。

#### ○お詫びと訂正

学会報66集の論文掲載順に誤りがありました。論文審査委員会から編集担当校に送付したファイルに不備があったためです。誠に申し訳ありません。正しくは、櫻木陽子会員の『梧桐雨』雑劇の晩秋の季節は、陳文輝会員の「元曲における戀愛と戦い」の後に入ります。会員の皆様にお詫びして訂正いたします。

## 出版委員会

委員長 釜谷 武志

第1回出版委員会を、7月26日に早稲田大学で開催しました。学会報に掲載する学界展望のコメント原稿を、哲学・文学・語学の三部門にわたって検討しました。

また、昨年度の懸案であった、学界展望を担当する際の「工程表(全体のマニュアル)」を、委員会として作成しました。

第2回の委員会は、10月11日、大谷大学での学術大会の1日目に開きました。主な内容は以下のとおりです。

### ○学会報第66集の刊行について

投稿論文の分量は、400字詰め原稿用紙換算で55枚以内と定められているが、掲載にあたり閲読委員の修正意見にしたがって加筆するために、60枚を超えて入稿する例も見られた。完成形態で16ページを超過することになるので、校正時点で執筆者に削減するように要請した。今後も論文審査委員会と連携しながら、原稿枚数の厳守を図るようにする。

### ○抜き刷りについて

論文等の抜き刷りは、執筆者の実費(送料を含む)負担で希望者のみに作成している。希望者は初校戻しの時点で、学会報編集担当校に希望部数を伝え、再校戻しの時に、代金を学会事務局に入金する。期日までに入金が無い場合は、抜き刷りの作成をとりやめる。

### ○学会報掲載論文の奇数ページ起こしについて

3年前の学会報から、論文部分については奇数ページ起こしで版を組んでいる。このことの是非について、前日に開催された理事会での審議を受けて、今後も奇数ページ起こしを継続することを承認した。

2015年10月刊行予定の学会報第67集にも、学界展望を掲載します。その基礎資料となる文献目録(学会ホームページに掲載)を作成するために、著書・論文等のデータを収集しています。2014年1月～12月の1年間に発行された論文等の情報をお知らせ下さい。

〔哲学部門〕 南澤 良彦 会員(九州大学)

電子メール : nihonchugoku.tetugaku@gmail.com

〔文学部門〕 釜谷 武志 会員(神戸大学)

電子メール : nihonchugoku.bungaku@gmail.com

〔語学部門〕 松江 崇 会員(北海道大学)

電子メール : nihonchugoku.gogaku@gmail.com



## 選挙管理委員会

委員長 土田健次郎

本年度は、会則第11条にもとづき、評議員選挙、理事長選挙、監事選挙を以下の日程で行った。それぞれの結果については、別途公表されているのでここには記さない。

### 1. 評議員選挙

平成26年(2014年)5月24日(土)に早稲田大学において投票用紙を発送し、6月28日(土)に同大学において開票を行った。

### 2. 理事長選挙

平成26年7月5日(土)に早稲田大学において投票用紙を発送し、8月2日(土)に同大学において開票を行った。

### 3. 監事選挙

平成26年10月10日(金)に大谷大学で開かれた次期評議員会において投票と開票を行った。

### 4. 選挙管理委員会の開催

平成26年10月11日(土)に大谷大学で選挙管理委員会を開催した。

なお大会時に役員会及び総会で配布した「評議員選挙の結果について」の「日本中国学会平成27・28年度理事長」の項の以下の点が誤っていたので訂正する。

(誤) 平成26年8月4日確定

(正) 平成24年8月2日確定

## 研究推進・国際交流委員会

委員長 藤井 省三

今期の研究推進国際交流委員会は、以下の委員・幹事により構成されています。(あいうえお順)

吾妻 重二 委員(留任、哲学、関西大学)

静永 健 副委員長(文学、九州大学)

古屋 昭弘 委員(留任、語学、早稲田大学)

松村 茂樹 委員(留任、文学・芸術、大妻女子大学)

王 俊文 幹事(留任、文学、早稲田大学等講師)

本委員会は今年度に入り、Eメール会議を数回、京都・大谷大学大会時に本会議を一回開きまして、主に以下の二点について審議しました。

(一)日本滞在中の外国人研究者(複数)の大会招聘報告の促進。本件は吾妻委員が従来力説してきたことでありますが、大会開催校との調整等の課題が残されており、今後も継続して審議する予定です。

(二)書道・絵画から映画・アニメまで日中文化交流に関する「文化交流部会」の新設。本件は松村委員の提案によるもので、中国学の枠組を古典芸術からポップカルチャーにまで拡大しようという意欲的な試みです。中国語圏文化に対する幅広い理解は、国境を越えた市民的交流の促進にも繋がるものと期待されます。関連学会との関係等の課題が残されており、鋭意審議を重ねて、次回理事会に文書にて提案する予定です。

会員の皆様からのご意見、ご要望をお待ちしております。

## 広報委員会

委員長 平田 昌司

科学技術振興機構中国総合研究センターによる『日本中国学会報』論文公開にあたっては、最新号が刊行され次第、前号(通常は1年前の号)の全文を公開するのが適切だと認めて、理事会に提案した。また、委員長の個人的意見としてであるが、学界展望を外国語訳し、日本国内における中国哲学・文学・語学の毎年の研究動向を、国際学界に向けてすみやかに発信するのが望ましいという意見を述べた。

## 将来計画特別委員会

委員長 佐藤錬太郎

将来計画特別委員会は、10月11日、本大会開催中の大谷大学で開催され、次の項目が議題となった。

1. 若手の学会費の減免について
2. 他学会との連携について
3. 理事の任期について

1の議題については、新規若手会員の獲得、就職難に伴う若手会員の負担軽減、および70歳以上会員の学会費が4000円に減額されたことに伴い若手会員についても学会費の軽減をしてほしいという要望に答えて、40歳以下の会員で専任職に未就職の会員について、学生会員と同じく会費を4000円に減額するという提案をしたが、収入が毎年20万円ほど減少するため、理事会では賛否両論で承認を得られず、継続審議することとなった。委員会では、30歳以下もしくは35歳以下は一律4000円に減額、全会員6000円に減額などの意見が出されたため、会費収入への影響について、事務局に試算を依頼し、具体的な数値が出た後、あらためて検討することとした。なお、会費取

入減少の対策の一つとし、5月開催の理事会で本委員会委員長より2年に一度、3月末に開催される新旧理事の引き継ぎ会(開催費用約30万円)を取りやめるという提案をしたところ、全会一致で了承された。

2については、漢文教育の振興および若手会員の獲得のため、関係諸学会、特に全国漢文教育学会との連携を強化する必要があることを確認した。若手研究者の負担軽減のため、他学会と両属した場合、学会費の減免措置が必要ではないかとの意見が出され、引き続き検討することとなった。

3の議題については、理事会の活性化のため数年来検討してきたが、検討の結果、任期を二期四年とし再選を妨げない、という案を理事会に提言したが、2年に一度の理事長の改選時に改めて新理事長より理事の委嘱をしており、事実上、理事の任期は2年で、再任をさまたげないので、現行制度のままでもよいということで、理事会の承認を得た。



# ❖ 日本中国学会2013年度(平成25年度) 収支決算書

2013年4月1日～2014年3月31日

(単位：円)

| 科目         | 予算          | 決算          | 摘要      | 差額       |
|------------|-------------|-------------|---------|----------|
| 1. 前年度繰越   | ¥9,017,064  | ¥9,017,064  |         | ¥0       |
| 2. 会員会費    | ¥11,000,000 | ¥11,487,109 |         | ¥487,109 |
| 3. 寄付金     | ¥800,000    | ¥963,575    |         | ¥163,575 |
| 4. 預金利息    | ¥1,500      | ¥1,551      |         | ¥51      |
| 5. 著作権料分配金 | ¥0          | ¥21,000     |         | ¥21,000  |
| 総計         | ¥20,818,564 | ¥21,490,299 | (A)収入総計 | ¥671,735 |

| 科目               | 予算         | 決算         | 摘要              | 差額       |
|------------------|------------|------------|-----------------|----------|
| <b>1. 事務局総務費</b> | ¥2,560,000 | ¥1,900,078 | (1)～(7)         | ¥659,922 |
| (1)印刷費           | ¥900,000   | ¥753,215   | 「復り」上掲印刷費を含む    | ¥146,785 |
| (2)通信費           | ¥650,000   | ¥461,239   | 「復り」発送費を含む      | ¥188,761 |
| (3)交通費           | ¥100,000   | ¥52,930    | 事務局補佐員交通費等      | ¥47,070  |
| (4)消耗品費          | ¥300,000   | ¥236,064   |                 | ¥63,936  |
| (5)庶務処理費         | ¥50,000    | ¥0         |                 | ¥50,000  |
| (6)雑費            | ¥350,000   | ¥186,630   | うち振込手数料¥131,510 | ¥163,370 |
| (7)業務委託料         | ¥210,000   | ¥210,000   | 斯文会             | ¥0       |
| <b>2. 事務局人件費</b> | ¥1,660,000 | ¥1,670,000 | (1)(2)          | ¥-10,000 |
| (1)幹事手当          | ¥360,000   | ¥360,000   |                 | ¥0       |
| (2)謝金            | ¥1,300,000 | ¥1,310,000 | 事務局補佐員謝金等       | ¥-10,000 |
| <b>3. 事務局会議費</b> | ¥470,000   | ¥317,214   | (1)(2)          | ¥152,786 |
| (1)会議費           | ¥120,000   | ¥83,294    |                 | ¥36,706  |
| (2)役員旅費          | ¥350,000   | ¥233,920   | 第1回理事会          | ¥116,080 |
| <b>4. 事業費</b>    | ¥5,500,000 | ¥4,784,501 | (1)～(3)         | ¥715,499 |
| (1)学会報等刊行費       | ¥4,400,000 | ¥3,696,529 | イ～ニ             | ¥703,471 |
| イ.印刷費            | ¥2,300,000 | ¥1,713,075 | 学会報及び名簿         | ¥586,925 |
| ロ.編集費            | ¥1,400,000 | ¥1,400,000 |                 | ¥0       |
| ハ.翻訳謝金           | ¥300,000   | ¥224,000   | 英文要旨作成          | ¥76,000  |
| ニ.発送費            | ¥400,000   | ¥359,454   | (株)カンセイ業務委託等    | ¥40,546  |
| (2)学術大会運営費       | ¥1,000,000 | ¥1,000,000 |                 | ¥0       |
| (3)若手シンポジウム運営費   | ¥100,000   | ¥87,972    |                 | ¥12,028  |

| 科目                 | 予算          | 決算          | 摘要              | 差額         |
|--------------------|-------------|-------------|-----------------|------------|
| <b>5. 各種委員会運営費</b> | ¥1,355,000  | ¥1,063,657  | (1)～(7)         | ¥291,343   |
| (1)大会委員会           | ¥65,000     | ¥38,778     |                 | ¥26,222    |
| イ.通信費              | ¥5,000      | ¥910        |                 | ¥4,090     |
| ロ.会議・旅費            | ¥50,000     | ¥32,700     |                 | ¥17,300    |
| ハ.謝金               | ¥5,000      | ¥5,000      |                 | ¥0         |
| ニ.消耗品・雑費           | ¥5,000      | ¥168        |                 | ¥4,832     |
| (2)論文審査委員会         | ¥780,000    | ¥612,260    |                 | ¥167,740   |
| イ.通信費              | ¥100,000    | ¥82,310     |                 | ¥17,690    |
| ロ.会議・旅費            | ¥600,000    | ¥463,703    |                 | ¥136,297   |
| ハ.謝金               | ¥60,000     | ¥60,000     |                 | ¥0         |
| ニ.消耗品・雑費           | ¥20,000     | ¥6,247      |                 | ¥13,753    |
| (3)出版委員会           | ¥225,000    | ¥183,440    |                 | ¥41,560    |
| イ.通信費              | ¥5,000      | ¥830        |                 | ¥4,170     |
| ロ.会議・旅費            | ¥200,000    | ¥167,610    |                 | ¥32,390    |
| ハ.謝金               | ¥5,000      | ¥5,000      |                 | ¥0         |
| ニ.学会便り編集費          | ¥10,000     | ¥10,000     |                 | ¥0         |
| ホ.消耗品・雑費           | ¥5,000      | ¥0          |                 | ¥5,000     |
| (4)選挙管理委員会         | ¥20,000     | ¥5,160      | 非改選年度           | ¥14,840    |
| イ.通信費              | ¥5,000      | ¥160        |                 | ¥4,840     |
| ロ.会議・旅費            | ¥5,000      | ¥0          |                 | ¥5,000     |
| ハ.謝金               | ¥5,000      | ¥5,000      |                 | ¥0         |
| ニ.消耗品・雑費           | ¥5,000      | ¥0          |                 | ¥5,000     |
| (5)研究推進・国際交流委員会    | ¥20,000     | ¥5,000      |                 | ¥15,000    |
| イ.通信費              | ¥5,000      | ¥0          |                 | ¥5,000     |
| ロ.会議・旅費            | ¥5,000      | ¥0          |                 | ¥5,000     |
| ハ.謝金               | ¥5,000      | ¥5,000      |                 | ¥0         |
| ニ.消耗品・雑費           | ¥5,000      | ¥0          |                 | ¥5,000     |
| (6)広報委員会           | ¥225,000    | ¥213,937    |                 | ¥11,063    |
| イ.通信費              | ¥15,000     | ¥13,440     |                 | ¥1,560     |
| ロ.会議・旅費            | ¥5,000      | ¥0          |                 | ¥5,000     |
| ハ.謝金               | ¥5,000      | ¥10,000     |                 | ¥-5,000    |
| ニ.消耗品・雑費           | ¥50,000     | ¥14,697     |                 | ¥35,303    |
| ホ.ホームページ管理費        | ¥150,000    | ¥175,800    |                 | ¥-25,800   |
| (7)将来計画特別委員会       | ¥20,000     | ¥5,082      |                 | ¥14,918    |
| イ.通信費              | ¥5,000      | ¥82         |                 | ¥4,918     |
| ロ.会議・旅費            | ¥5,000      | ¥0          |                 | ¥5,000     |
| ハ.謝金               | ¥5,000      | ¥5,000      |                 | ¥0         |
| ニ.消耗品・雑費           | ¥5,000      | ¥0          |                 | ¥5,000     |
| 1～5<br>予備費         | ¥11,545,000 | ¥9,735,450  |                 | ¥1,809,550 |
|                    | ¥9,273,564  | ¥0          | 支出費目としては計上しない   |            |
| 合計                 | ¥20,818,564 | ¥9,735,450  | (B)支出合計         | ¥9,735,450 |
| 次年度繰越金             | -           | ¥11,754,849 | (A)収入総計-(B)支出合計 |            |
| 総計                 | ¥20,818,564 | ¥21,490,299 |                 | ¥-671,735  |

## 学会基金

| 基本金               | 金額         |
|-------------------|------------|
| 前年度繰越金            | ¥1,272,590 |
| 特別会計積立金拠出         | ¥0         |
| 預金利息              | ¥939       |
| 信託収益金             | ¥412       |
| 合計                | ¥1,273,941 |
| 日本中国学会賞           | ¥160,000   |
| 日本中国学会若手シンポジウム奨励賞 | ¥0         |
| 次年度繰越金            | ¥1,113,941 |
| 合計                | ¥1,273,941 |

| 備考(基本金内訳) | 金額         |
|-----------|------------|
| 奥野基金      | ¥500,000   |
| 佐藤基金      | ¥200,000   |
| 池田基金      | ¥300,000   |
| 伊藤基金      | ¥300,000   |
| 積立基金      | ¥3,000,000 |

上記の通り、相違ないことを認めます。

2014年4月28日  
日本中国学会監事

牧角悦子  
内山精也  
大島 晃

# ❖ 日本中国学会2014年度(平成26年度) 予算書

2014年4月1日～2015年3月31日

(単位：円)

|      | 科目         | 予算          | 摘要 |
|------|------------|-------------|----|
| 収入の部 | 1. 前年度繰越   | ¥11,754,849 |    |
|      | 2. 会費      | ¥10,500,000 |    |
|      | 3. 寄付金     | ¥800,000    |    |
|      | 4. 預金利息    | ¥1,500      |    |
|      | 5. 著作権料分配金 | ¥0          |    |
|      | 合計         | ¥23,056,349 |    |

|            | 科目               | 予算         | 摘要             |
|------------|------------------|------------|----------------|
| 支出の部       | <b>1. 事務局総務費</b> | ¥2,310,000 | (1)～(7)        |
|            | (1)印刷費           | ¥900,000   | 「便り」・封筒等を含む    |
|            | (2)通信費           | ¥650,000   | 「便り」等発送を含む     |
|            | (3)交通費           | ¥100,000   |                |
|            | (4)消耗品費          | ¥50,000    |                |
|            | (5)庶務処理費         | ¥50,000    |                |
|            | (6)雑費            | ¥350,000   | 振込手数料および対外費を含む |
|            | (7)業務委託料         | ¥210,000   | 斯文会            |
|            | <b>2. 事務局人件費</b> | ¥1,560,000 | (1)(2)         |
|            | (1)幹事手当          | ¥360,000   |                |
|            | (2)謝金            | ¥1,200,000 | 事務局補佐員謝金を含む    |
|            | <b>3. 事務局会議費</b> | ¥720,000   | (1)(2)         |
|            | (1)会議費           | ¥120,000   |                |
|            | (2)役員旅費          | ¥600,000   | 第1回及び第4回理事会    |
|            | <b>4. 事業費</b>    | ¥5,200,000 | (1)(2)         |
|            | (1)学会報等刊行費       | ¥4,200,000 | イ～ニ            |
|            | イ. 印刷費           | ¥2,300,000 | 学会報及び名簿        |
| ロ. 編集費     | ¥1,200,000       |            |                |
| ハ. 翻訳謝金    | ¥300,000         | 英文要旨作成     |                |
| ニ. 発送費     | ¥400,000         |            |                |
| (2)学術大会運営費 | ¥1,000,000       |            |                |

## 学会基金

|      | 基本金     | 予算         |
|------|---------|------------|
| 収入の部 | 前年度繰越金  | ¥4,300,000 |
|      | 預金利息    | ¥1,113,941 |
|      | 信託収益金   | ¥1,000     |
|      | 合計      | ¥500       |
| 支出の部 | 日本中国学会賞 | ¥80,000    |
|      | 次年度繰越金  | ¥1,035,441 |
|      | 合計      | ¥1,115,441 |

| 備考(基本金内訳) | 金額         |
|-----------|------------|
| 奥野基金      | ¥500,000   |
| 佐藤基金      | ¥200,000   |
| 池田基金      | ¥300,000   |
| 伊藤基金      | ¥300,000   |
| 積立基金      | ¥3,000,000 |

|              | 科目                 | 予算         | 摘要      |
|--------------|--------------------|------------|---------|
| 支出の部         | <b>5. 各種委員会運営費</b> | ¥1,330,000 | (1)～(7) |
|              | (1)大会委員会           | ¥65,000    |         |
|              | イ. 通信費             | ¥5,000     |         |
|              | ロ. 会議・旅費           | ¥50,000    |         |
|              | ハ. 謝金              | ¥5,000     |         |
|              | ニ. 消耗品・雑費          | ¥5,000     |         |
|              | (2)論文審査委員会         | ¥780,000   |         |
|              | イ. 通信費             | ¥100,000   |         |
|              | ロ. 会議・旅費           | ¥600,000   |         |
|              | ハ. 謝金              | ¥60,000    |         |
|              | ニ. 消耗品・雑費          | ¥20,000    |         |
|              | (3)出版委員会           | ¥225,000   |         |
|              | イ. 通信費             | ¥5,000     |         |
|              | ロ. 会議・旅費           | ¥200,000   |         |
|              | ハ. 謝金              | ¥5,000     |         |
|              | ニ. 学会便り編集費         | ¥10,000    |         |
|              | ホ. 消耗品・雑費          | ¥5,000     |         |
|              | (4)選挙管理委員会         | ¥120,000   | 改選年度    |
|              | イ. 通信費             | ¥15,000    |         |
|              | ロ. 会議・旅費           | ¥60,000    |         |
|              | ハ. 謝金              | ¥40,000    |         |
|              | ニ. 消耗品・雑費          | ¥5,000     |         |
|              | (5)研究推進・国際交流委員会    | ¥20,000    |         |
|              | イ. 通信費             | ¥5,000     |         |
|              | ロ. 会議・旅費           | ¥5,000     |         |
|              | ハ. 謝金              | ¥5,000     |         |
|              | ニ. 消耗品・雑費          | ¥5,000     |         |
| (6)広報委員会     | ¥100,000           |            |         |
| イ. 通信費       | ¥15,000            |            |         |
| ロ. 会議・旅費     | ¥5,000             |            |         |
| ハ. 謝金        | ¥5,000             |            |         |
| ニ. 消耗品・雑費    | ¥50,000            |            |         |
| ホ. ホームページ管理費 | ¥25,000            |            |         |
| (7)将来計画特別委員会 | ¥20,000            |            |         |
| イ. 通信費       | ¥5,000             |            |         |
| ロ. 会議・旅費     | ¥5,000             |            |         |
| ハ. 謝金        | ¥5,000             |            |         |
| ニ. 消耗品・雑費    | ¥5,000             |            |         |
| 1～5          | ¥11,120,000        |            |         |
| 予備費          | ¥11,936,349        |            |         |
| 合計           | ¥23,056,349        |            |         |

2014年10月11日の会員総会(於大谷大学)でご報告した予算書の数字に誤りがございました(学会基金・収入/支出の部)。謹んで訂正するとともに、会員各位に深くお詫びいたします。

(事務局)

## ❖ 学界展望へのご協力(資料提供)のお願い

『日本中国学会報』には、毎冊、「学界展望」が掲載され、またその基礎資料となる文献目録が学会ホームページに掲載されています。これは編集担当校の尽力によって可能な限り広く収集しているものですが、出版物が増加する一方の昨今、捜求はいよいよ困難になっています。執筆されたご本人からのお知らせをお願いするゆえんです。

次号、第67集(2015年10月刊行予定)掲載の「学界展望」の基礎資料として、2014年の文献目録を作成します。2014年1月～12月に刊行された著書・雑誌論文等をお知らせ願います。

なお、すでに2006年から郵便によるご報告は廃止しておりますので、電子メールでのみお知らせください。

論文も著書も一篇、一冊ごとに部門・分野をご記入の上、以下の該当する部門の担当者にお送り願います。

[哲学部門] 南澤 良彦 会員(九州大学)  
電子メール: nihonchugoku.tetugaku@gmail.com

[文学部門] 釜谷 武志 会員(神戸大学)  
電子メール: nihonchugoku.bungaku@gmail.com

[語学部門] 松江 崇 会員(北海道大学)  
電子メール: nihonchugoku.gogaku@gmail.com

※アドレスは学界展望報告用のもので、次年度以降担当者が変わっても、引き続き使用する予定です。

各部門の分類は以下の通りです。

- 哲学部門
- 一、総記
  - 二、先秦
  - 三、秦・漢
  - 四、魏・晋・南北朝
  - 五、隋・唐

- 六、宋・金・元
- 七、明・清
- 八、近現代
- 九、琉球・朝鮮
- 十、日本
- 十一、書誌学
- 十二、その他

### ○文学部門

- 一、総記
- 二、先秦
- 三、漢・魏・晋・南北朝
- 四、隋・唐・五代
- 五、宋
- 六、金・元・明
- 七、清
- 八、近現代
- 九、民間文学・習俗
- 十、日本漢文学
- 十一、比較文学
- 十二、書誌

### ○語学部門

- 一、総記
- 二、文字・訓詁
- 三、音韻
- 四、語彙
- 五、語法
- 六、方言
- 七、教育・学習(教科書は含みません)

※国内発行の刊行物に限ります。発表言語の種類は問いません。



## ❖ 2014年度 会員動向

### ●会員動向(2014年11月16日現在)

総会員数1772名、準会員数55機関、賛助会員数13社

### ●訃報

『学会便り』本年度第1号発行以後、次の方々のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。(敬称略)

鬼頭 有一 (関東地区) 2013年12月9日

木下 鉄矢 (近畿地区) 2014年9月22日

### ●退会会員

○退会申出会員(第1回理事会承認分) 34名1機関

|       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 阿辻 哲次 | 井波 律子 | 小笠原博慧 |
| 海 沢洲  | 菊地久理子 | 工藤 元男 |
| 久保 卓哉 | 小南 一郎 | 近藤 徹  |
| 齊藤 忠壽 | 坂元ひろ子 | 三瓶はるみ |
| 志村 治  | 菅原 博子 | 立石 節子 |
| 千坂 嶮峰 | 張 娜麗  | 長井 由花 |
| 新島 翠  | 西脇 隆夫 | 萩野 脩二 |
| 班 偉   | 表野 和江 | 平井 有慶 |
| 本田千恵子 | 松尾むつ子 | 松田 佳子 |
| 水本 圭亮 | 山中 恒己 | 吉田 照子 |
| 依藤 醇  | 李 海   | 渡部 英喜 |
| 呉 二煥  |       |       |

和歌山大学付属図書館(準会員)

○退会申出会員(第2回理事会承認分) 4名

小野澤路子 静 慈円 張 軼欧  
山田 勝久

○4年会費未納による退会会員 35名

### ●住所不明会員 10名

|       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 王 艶珍  | 大嶋 隆  | 金子 久夫 |
| 玉野井純子 | 張 丹鳳  | 沼尻 俊裕 |
| 松本 武晃 | 宮内 四郎 | 山本 律  |
| 李 宛儒  |       |       |

※上記会員の連絡先をご存じの方は、お手数ですが事務局までご一報ください(メールアドレス: info@nippon-chugoku-gakkai.org)。

## ❖ 2015-2016年度 新役員一覧

### 理事長

土田健次郎

### 副理事長

金 文京 小島 毅

### 理事

|       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 赤井 益久 | 宇佐美文理 | 大木 康  |
| 垣内 景子 | 釜谷 武志 | 神塚 淑子 |
| 佐竹 保子 | 佐藤錬太郎 | 静永 健  |
| 藤井 省三 | 松原 朗  | 渡辺 義浩 |

### 監事

牧角 悦子 [主席監事]  
大西 克也 和田 英信

### 評議員

|       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 赤井 益久 | 阿川 修三 | 浅野 裕一 |
| 浅見 洋二 | 吾妻 重二 | 安藤 信廣 |
| 井川 義次 | 池田 秀三 | 市川 桃子 |
| 市來津由彦 | 宇佐美文理 | 内山 精也 |
| 大木 康  | 大島 晃  | 大西 克也 |
| 岡崎 由美 | 垣内 景子 | 加藤 国安 |
| 加藤 敏  | 釜谷 武志 | 神塚 淑子 |
| 川合 康三 | 稀代麻也子 | 木津 祐子 |
| 金 文京  | 小島 毅  | 後藤 秋正 |
| 小松 建男 | 近藤 浩之 | 齋藤 希史 |
| 佐竹 保子 | 佐藤錬太郎 | 静永 健  |
| 柴田 篤  | 下定 雅弘 | 白水 紀子 |
| 竹村 則行 | 土田健次郎 | 戸倉 英美 |
| 富永 一登 | 中里見 敬 | 二階堂善弘 |
| 野間 文史 | 野村 鮎子 | 花登 正宏 |
| 東 英寿  | 平田 昌司 | 藤井 省三 |
| 古屋 昭弘 | 堀池 信夫 | 牧角 悦子 |
| 松浦 恆雄 | 松原 朗  | 松村 茂樹 |
| 三浦 秀一 | 柳川 順子 | 湯浅 邦弘 |
| 卯 和順  | 和田 英信 | 渡邊 義浩 |

### 顧問

|       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 荒木 見悟 | 池田 知久 | 石川 忠久 |
| 今鷹 真  | 岡村 繁  | 加地 伸行 |
| 興膳 宏  | 戸川 芳郎 | 福井 文雅 |
| 町田 三郎 | 村山 吉廣 |       |

### 幹事

阿部 光磨 大場 一央

## ❖ 2014年度 新入会員一覧

10月10日開催の今年度評議員会で入会が承認されたのは、以下の通りです。

### ●通常会員 17名

|       |              |
|-------|--------------|
| 堀川 慎吾 | 東北大学(院)      |
| 池田 宏  | 駒場東邦中学校・高等学校 |
| 石塚 薫  | 横浜清陵総合高等学校   |
| 北川 直子 | 慶應義塾大学(院)    |
| 志村 敦弘 | 東洋大学大学院修了    |
| 蔣 建偉  | 早稲田大学(院)     |
| 山本健太郎 | 東京大学(院)      |
| 李 麗   | 名古屋大学(院)     |
| 神戸 宏明 | 関西大学(院)      |
| 孫 琳淨  | 京都府立大学(院)    |
| 趙 蕊蕊  | 大阪大学(院)      |
| 陳 維   | 関西大学(院)      |
| 任 夢溪  | 関西大学(院)      |
| 宮本 陽佳 | 京都府立大学(院)    |
| 李 思漢  | 京都大学(院)      |
| 李 婷   | 同志社女子大学      |
| 王 宇南  | 西南学院大学(院)    |

### ●国外会員 2名

|       |         |
|-------|---------|
| 白石 將人 | 北京大学(院) |
| 楊 穎   | 華僑大学    |

### ●賛助会員 1社

同学社

なお、以下の方々については6月に開催された持ち回り評議員会において入会が承認され、すでに今年度の名簿に記載されています。

### ●通常会員 26名

|       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 五十嵐恵太 | 稲森 雅子 | 王 俊鈞  |
| 小田 健太 | 籠谷 香理 | 查 屏球  |
| 齊藤 孝裕 | 齊藤 晴彦 | 余 筠珺  |
| 邵 劫   | 白崎 藍  | 鈴木 裕亮 |
| 石 碩   | 関 光世  | 趙 ウニル |
| 陳 佑真  | 田 婧   | 長谷川 慎 |
| 潘 超   | 平原 真紀 | 富 嘉吟  |
| 福田 文彬 | 松葉久美子 | 山口 綾子 |
| 李 月珊  | 廖 明飛  |       |



## ❖ 事務局からのお知らせ

### 彙報

第1回理事会(6月7日開催)での決定事項を受け、6月10日付で通信による臨時評議員会を開催した。報告事項は以下の通り。

#### ●2014年度日本中国学会賞受賞者の決定について

[哲学・思想部門]

該当者なし

[文学・語学部門]

遠藤星希会員

「李賀の詩にみる循環する時間と神仙の死」

#### ●新入会員の決定について

通常会員26名の入会希望があり、審議の結果、全員の入会を承認。

また、10月10日開催の今年度評議員会における報告・審議事項は以下の通り。

[報告事項]

- ・理事長による会務報告
- ・2015-16年度評議員・理事長選挙の結果報告
- ・2015-16年度副理事長・理事の委嘱について
- ・監事選挙の結果報告
- ・会員動向について
- ・各種委員会報告
- ・『日本中国学会報』第66集及び名簿の発行について
- ・学会報編集担当校・学会展望担当校・大会開催校について(2015年度)

学会報編集担当校

金沢大学

学会展望編集担当校

哲学／九州大学

文学／神戸大学

語学／北海道大学

学術大会開催校

國學院大学

(2015年10月10日[土]～11日[日])

[審議事項]

- ・2013年度決算報告・監査報告
- ・2014年度予算案について
- ・新入会員の承認
- ・第66回学術大会総会次第について

翌10月11日の総会において、評議員会の議決事項が報告された。

#### ◎会費の納付について

会費未納の方は、至急ご送金願います。2カ年(2013・2014年度)未納の方には、本年度の学会報を送付しておりません。また、4年間滞納されますと除名処分となりますのでご注意ください。

郵便振替口座：00160-9-89927

#### ◎住所・所属機関等の変更について

近年、学会からの送付物(学会報・便り等)の発送に宅配業者のメール便を利用しています。メール便では一般に転居先への転送が行われませんので、転居の際は速やかに事務局までご通知ください。また、所属機関に変更が生じた場合、特に学生会員の皆さんが学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡くださいますようお願い申し上げます。

メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org

#### 「国内学会消息」についてのお知らせ

「国内学会消息」は、来年4月発行予定の「学会便り」に載せることになっています。

2014年1月から12月までに開催された国内学会の原稿は、来年(2015年)2月末日までに、下記あてに電子メールでお送りください。お送りいただく電子テキストをそのまま印刷します。校正はありませんので、あらかじめご承知おきください。

Nihonchugoku.tayori@gmail.com

(「学会便り」2015年第1号編集用アドレス)

# 「日本中国学会報」論文執筆要領

日本中国学会

## 応募資格

1. 日本中国学会会員に限る。

## 使用言語等

2. 応募原稿（以下「原稿」と略称）は和文によるものとし、未公開のものに限る。ただし、口頭で発表しこれを初めて論文にまとめたものは未公開と見なす。

## 原稿枚数等

3. 原稿は校正時に加筆を要しない完全原稿とする。
4. 原稿枚数は、本文・注・図版等をあわせて、400字詰原稿用紙55枚以内（厳守）とする。注も原稿用紙1マスに1字を納める。ワープロ使用の場合は、用紙サイズはA4、1行30字毎ページ40行、文字は10.5ポイントを用いる。なお、第1ページの見易い場所に、投稿原稿を1行20字毎ページ20行に変換した場合の枚数を明記する。原稿量の上限は、字数ではなく、枚数によるので注意する。手書きの場合は電子データを別途提出する。電子データ入力を学会に依頼する場合、加算費用は執筆者負担となる。
5. 図版を必要とする場合、占有面積半ページ分を400字詰原稿用紙2枚の割合で換算する。図版原稿は原則としてそのまま版下として使用できる鮮明なものとし、掲載希望の縦・横の寸法を明示する。

## 体裁・表記等

6. 原稿は縦書きを原則とする。特に必要とするものについては、論文審査委員会の議を経て、横書きを認めることがある。
7. 引用文は内容に応じて原文、訳文、書き下し文のいずれかを用いるものとする。原文の場合は該当する訳文または書き下し文を、訳文または書き下し文の場合は該当する原文を本文中または注に明示する。ただし、一読して疑問の生ずる余地がないものについては、省略することを認める。中国語以外の外国語の引用もこれに準ずる。校勘・版本研究等内容上適切と認められるものについては、原文のみ引用することを妨げない。原文に返り点・送り仮名をつけることは原則として認めない。日本漢学・日本漢文等に関する内容のもので、訓点の施し方自体を論ずる場合はこの限りではないが、加算された印刷費は執筆者の負担とすることがある。
8. 原稿は旧漢字体・常用漢字体のいずれの使用も可とするが、印刷にあたっては全文を原則として旧漢字体（印刷標準字体）に統一する。但し、本人の申し出によって、常用漢字体での印刷を認める。活字は本文9ポイント、括弧内は8ポイントを、注はすべて8ポイントを使用する。特に本文括弧内を9ポイントにする場合および内容上特に異体字であることが必要な場合は、当該箇所にも明記する。
9. 注は、各章・節ごとにつけず、通し番号を施して全文の末尾にまとめる。割注は用いない。
10. 中国語のローマ字表記は、執筆者の選択にゆだねるが、同一論文中にあつては、ウェード式・漢語・拼音方案等何らかの統一があることが望ましい。ただし、特殊な綴りで通

用している固有名詞（例：孫逸仙Sun Yat-sen）、本人が自分の名前に使用している綴りについてはその使用も認める。日本語のローマ字表記は、ヘボン式の使用を原則とする。

## 論文要旨

11. 応募時の原稿には400字5枚以内の論文要旨を添付する。
12. 学会報掲載の論文要旨は、英文とする。論文掲載者は、完成原稿提出時に、400字3枚（1200字）程度の日本語要旨を添付する。

## 原稿提出

13. 原稿などは必ず書留により下記に郵送するものとし、毎年1月20日までの消印のあるものを有効とする。持参は認めない。

〒113-0034 東京都文京区湯島1-4-25

斯文会館内 日本中国学会

14. 応募の際、審査を希望する部門（哲学・思想、文学・語学、日本漢学）の別を原稿第1ページに朱書する。ただし、論文の内容により、複数部門にわたる審査を希望することができる。
15. 応募時には、本文・要旨をそれぞれ4部ずつ提出する。（事故に備え、提出前にあらかじめ自家用のコピーをも作成しておくことが望ましい。）又、原稿は原則として返却しない。
16. 応募時には、①原稿のやりとりをする際の連絡先（住所、電話、メールアドレス）、②現在の所属先、③最終出身大学及び修了（退学）年を書いた紙を提出する。（書式は自由。）

## 校 正

17. 執筆者校正は再校までとする。校正時の加筆・訂正は初校段階に限り、必要最小限のものについてのみ認める。

## 抜 刷

18. 論文抜刷に関わる作成費用等は本人負担とする。

## そ の 他

19. 掲載論文については、電磁的記録として記録媒体に複製する。これを日本中国学会の会員、図書館、研究機関、それらに準ずる組織及びその他の公衆に譲渡、貸与、送信すること、またその際に必要と認められる範囲の改変を行うことがある。

（昭和62年10月11日制定）

（平成13年5月13日修正）

（平成14年10月13日一部修正）

（平成15年10月5日一部修正）

（平成19年10月7日一部修正）

（平成20年5月17日一部修正）

（平成21年10月11日一部修正）

（平成22年6月6日一部修正）

（平成22年10月10日一部修正）

（平成23年10月9日一部修正）

（平成24年10月7日一部修正）

（平成25年3月31日一部修正）

（平成25年10月13日一部修正）